

公開輪読会2016

親鸞仏教センターでは、2006年より研究員と共に仏教の『聖典』をひもとき、その言葉に現代を生きる力を見いだしていくことを願い、研究員と読む公開輪読会として、どなたでも参加いただける連続講座を開催している。

本輪読会は、一つのテーマを決め、各研究員が日ごろの研究テーマと関連したテキストを読み進めている。本年度は、昨年の2016年11月25日から本年2月末にかけ、3名（各4回・全12回）の研究員がうけもった。毎回、僧侶、門徒に限らず、会社員や定年後の方など、年齢・立場を問わない約25名が参加し、質疑応答も活発に行われるなど、研究員と参加者の交流の場となった。

本輪読会の共通のテーマであるが、今回は「宗教と生活」とした。浄土教、あるいは親鸞の教えは、この現実の生活に何か変革を、それこそ「救い」をもたらすものであるのか、ただ死後の「救い」を実現するものではないのか。この問題はひとえに浄土教に投げかけられたものではない。明治期においても世俗と乖離した出世間的な仏教の側面が非難されたように、「宗教と生活」の距離はつとに問題とされてきたのである。こうした問いは誰しもが抱くもの——というよりも“果たしてこの「生」に変革を求めずして何を求めるのか”と己に問うことこそ求道の端緒なのかもしれない。こうした問題設定のもと三方向から「宗教と生活」について考究した。ここでは、各研究員よりその一部を報告する。



輪読会の様子

Living Discourse on Buddhism

—井上円了の『仏教活論』と仏教近代化の諸問題

親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉

近代国家としてのあり方を模索していた明治期の日本においては、仏教が本来有している「出世間」的な側面だけでなく、国家や社会に対して仏教はいかにして関わる



のかという「世間」的な側面が厳しく問い直された。廃仏毀釈や西洋の学問および宗教（科学・哲学・キリスト教・東洋学）によって内外から批判されていた明治の仏教は、近代国家における自らの位置取りを再定義し、それに従った変革が求められていたのである。

本輪読会では、こうした課題に対する代表的な取組みとして、井上円了の『仏教活論』を取り上げた。この書において円了は、当時の学術界において低く見積もられていた「大乘仏教」を哲学的な観点からとらえ直し、その真理性を世に問うたのであった。「万法」と「真如」ないし「相對」と「絶対」の相即不離を論じる大乘仏教の教理は、普遍的な（あるいは「出世間的」な）真理が、国家的・社会的な（あるいは「世間的」な）かたちとなって現れることを示すものとして再定式化された。こうした円了による「大乘仏教」の再構築は、清沢満之の精神主義や「新仏教」運動など、近代の仏教運動に基本的な枠組みを与えることにもなった。

しかし、円了が見る仏教の真の本質は「中道」であった。「世間」的な方向での仏教改良はどうしても必要であるが、それによって「出世間」的な側面が失われれば仏教の「中道」も失われてしまう。「世間」と「出世間」の間で、仏教者はいかなる選択を行いうるのか。両者の理念的な調和を、いかにして現実に「応用」しうるのか。円了が問うていたのはこのような問題であり、それは現代においても依然として重要な問題であり続けている。

唯信の生活

—『唯信鈔文意』を読む

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司

親鸞は40代から60代までのおよそ20年間を、関東の布教に費やした。そして、晩年に京都へ戻った後も、残された門弟たちと頻繁に書簡をやり取りし、また多くの著作を送っている。本輪読会が取り上げた『唯信鈔文意』も、そのような親鸞の、尽きざる教化の志願から生み出されたものであった。



この著作のなかで親鸞は、「唯信」を真実の信心であり、^{こけ}虚仮を離れた心であると定義している。しかしこれは、^{ぼんのう}煩惱が無くなった清らかな心境を言っているのではない。われわれは、どこまでも「煩惱熾盛^{しじょう}の衆生」（『聖典』626頁）であり、如来の本願を疑惑することしかできない身である。むしろ親鸞の言う「唯信」は、「虚仮」でしかない自己を知り、「恥じ、^{いた}傷む」心を言うのだろう。

では、その「唯信」に始まる生活とは、いかなるものでしょうか。そもそもわれわれが、自己を省みる視点を見失い、欲望の充足だけを目指すのであれば、そのような生き方は餓鬼や畜生と区別することができない。どこまでも「虚仮」でしかない自己を知り、そのような在り方と対決し続けるところにこそ、人間としての生活が開かれるのである。つまり「唯信」が無ければ、人間の生活も無いのである。

そして、人間が社会のなかを生きる存在である以上、「虚仮」と対決するという営みもまた、個人のなかで完結するものではない。親鸞における教化の営みも、自他の「虚仮」性と対決する「唯信」の心から始まるものであり、つまりは「唯信」の生活の一端であったと言えるだろう。ここから本輪読会では、親鸞における「唯信」の発露として、『唯信鈔文意』を読み進めていった。

〈行〉とは何か

—『西方指南抄』を読む

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

「死者や死後の問題を放棄し、世俗の生活を仏法から切り離して、宗教の問題をごく狭い範囲の「信」の問題に限定することでよいのであろうか。」と末木文美士氏は問題提起している（『親鸞 主上臣下、法に背く』〔ミネルヴァ書房、2016〕、284頁）。浄土の教えは、この自己が生きる“生活”の場に何も変革をもたらさないのか、あくまで“浄土”とは彼岸なのであってこの世界とは隔絶されたものなのか。これが本輪読会の中心にあった問いである。



「専修念仏」に^{ひるがえ}翻って、根本的な問題設定を確認してみたい。法然の明らかにした「専修念仏」は何か特定の生活状態にある者を指して弥陀の本願に預かる者だとは見ない。ゆえに、現実の生活を変革するものが「専修念仏」なのか否かは大いに議論されるところであろう。また、積極的に誤解すれば——これが誤解と言えるのかが一番の問題なのではあるが——、専らに念仏する行者となればよいのであり、日頃・日常の行の善し悪しなど気にする必要はない。むしろ気にしているのは、如何なる凡夫にも大慈悲を注ぐ仏智を疑うのだと。

これは机上の論難ではなく、法然、法然以降の門流においてつとに問題となってきた。法然遺文である親鸞筆『西方指南抄』所収の「七箇条制誡」の第四条において、法然は門弟に向かって「一。念仏門に於いて戒行なしと号して、専ら姪・酒・食肉を勧め、たまたま律儀を守る者を雑行と名く。弥陀の本願^{たの}を憑^{たの}む者、説いて造悪を恐るること勿^{なか}れといふことを^{ちようじ}停止すべし。」と訓戒している。

なぜこのような訓戒をしうるのか。いわゆる「現生往生」の問題なども含めて、浄土の教えと「現在」について本輪読会で問いを掘り下げた。